

南京 4 日感受

戴辛迺（立命馆大学、临床心理学）

在来中国之前，我一直觉得非常不安。不仅因为对于抗日战争我的了解十分有限，还因为在日本 5 年的留学经验给我带来的 identity 的困扰——有时候会无意识的忘记“我是一个中国人”。这样的我，参加这个工作坊到底能贡献什么，获得什么收获呢？我也想过，“算了，不用过于投入，做好翻译就行了。”现在想来，当时的态度是那么消极，也似乎在逃避着什么。

而实际当我参加了工作坊之后，我获得了很多新的发现，得到了很多感受，在这个工作坊里的 4 天让我成长了很多。

首先，参观大屠杀纪念馆，听生存者证言和各位参加者的故事、心情等等活动，让我感到上了一堂至今为止最有意义的有血有肉的历史课。课的内容不光是那些枯燥的历史人物和数字，更多的是人类共同的情感——悲伤、愤怒、羞耻、爱……能一边感受这些一边学习，真的非常难得。

此外，在工作坊中表演戏剧时，我仿佛觉得自己回到了童年，回到了一种单纯本真的状态。这个发现让我不禁思考，自己到底是从什么时候开始有这么一个认识：作为一个成年人不能太过直接率真的表现自己的情感，需要学会有意意识的抑制。我想，如果人人都想孩子那样拥有一颗单纯简单的心灵的话，也许没有什么不能化解的矛盾与仇恨吧。

不仅如此，在 4 天的活动中，我慢慢能正视纠结了很久的自己的 identity 的问题，学会如何去包容它而不是一味的逃避与责备。工作坊中我没有看到任何“我是中国人你是日本人（我们不一样）”这样的所谓划清界限的场景，看到的都是不论国籍大家共同合作的一幕一幕。这样的环境，让我觉得格外安心。

最后，真的很谢谢大家在活动中敞开心扉和我分享自己的心情。在学习临床心理学之前，其实我并不擅长这种心与心的交流，而在这次这个工作坊中的所见所闻所感给了我极大的震撼让我学习到了很多。在分享的时候，我发现有很多自己的心情大家也同样感受到了，也许在这个环境中，不论国籍、民族、文化背景，即使语言不通，大家感受到的东西也都是共通的吧。这也让我我坚信，心灵的沟通不需要依靠翻译。

谢谢大家给了我这么宝贵的一次经历！

8

南京で感じたもの

翁曉丹（立命館大学文学研究科研修生）

今回は通訳の仕事もしながらセミナーに参加させていただきました。去年7月に立命館で行われたワークショップに参加しましたが、今回南京で行うことに対して、期待しながらも心配していました。なぜなら、私は南京の大学で4年間を過ごし、日本語もそこで勉強し、いろいろ思い出がある場所だからです。歴史事実の発生地で、中国人が慣れていないドラマセラピーでワークショップを行うとどうなるかという心配もあったし、私が参加するなら、どんな感情が湧いてきて、そして自分がうまく処理できるかどうか、まったく把握できないという怖さもありました。

セミナーの1週間前、実家の祖父が他界し、死について考えながらセミナーに身を投じました。空港に日本人の先生とメンバーを迎えに行くときから、セミナーがすでに始まっているような気がしました。今回のセミナーでは、日本人の参加者も主役ですし、みんなほぼ初めての中国で、中国に着いた瞬間から感じたことは、そのあとのワークショップに何らかの作用があるかもしれないと考えていました。

ワークショップの初日から、悲しみ、痛みなどいろいろな感情が胸に湧き、昔から持っていた葛藤も混じっていて、最初は整理できない状態のままでワークショップにいました。

最初は、自分の葛藤ですごく辛かったのです。政治や軍事の目的で歴史を解釈して、その歴史観をそのまま教育やマスメディアを通して与えることで、国民の思想がコントロールされるのがいやだったので、日中の歴史を考えると、中立の立場に立とうと昔から思いましたが、いろいろ挫折して、辛かった経験もありました。したがって、セミナーの最初のころから、自分は日本側か、中